

カレン人難民キャンプはなぜ襲撃されたのか

タイ・ビルマ国境、ターク県メソットの町から北西にバイクを十五分も走らすと、ホイックローク難民キャンプにたどり着く。そこには、ビルマ政府（国家平和発展評議会「SPDC」）軍の暴力から逃れてきたカレン人が約九千人住んでいた。

三月十一日未明、このキャンプがビルマ側から越境した「武装集団」に襲撃され、キャンプの九割以上が焼き払われ、約千世帯が家を失った。昨年一月、同じような攻撃を受け、ようやくキャンプの再建が軌道に乗りかかっていたところだった。

この襲撃から十二日後、メソットの南に位置するモカ難民キャンプが襲われた。これらの襲撃は同じ「武装集団」の仕業だと伝えられている。

現地に滞在した一月末から二月中旬、難民キャンプをいくつか回った。そのとき、キャンプ襲撃の前兆はまったくなかった。今回の「焼き討ち」は、ビルマ軍事政権に対して四十九年間の武装抵抗続けているカレン民族同盟（KNU）を弱体化させる乾

期攻勢の一部なのか。事件の背景を探ってみた。

難民に繰り返されるビルマの攻撃

もともと今回のカレン族取材は、本誌第88号（一九九五年九月一日号）でカレン族の現状を報告し、昨年十一月バンコクで亡くなった日本人義勇兵・西山孝純氏（①）のカレン人の旧友を訊ね歩くのが目的であった。

ビルマ軍の迫害から逃れ、タイ領内に逃れた難民の数は現在、西山氏の二年半前報告から四万人以上も増え、十一万六千人にも達している。政府軍による村人への迫害が悪化している明白な証拠だ。

難民キャンプへの攻撃は、反軍政のシンボルでもあったKNU総司令部マプロウの陥落直後、一九九五年一月末から頻繁に起こってきた。

襲撃の中心的な役割を担ってきたのは、SPDC軍の援助を受け、KNUから分派した民主カレン仏教徒機構（DKBO）の軍事部門・民主カレン仏教徒軍（DKBA）であった。

キャンプ攻撃の目的は、タイ領内に越境した難民をビルマ側に連れ戻すためである。「民族融和」を唱えるSPDCにとって、タイ領内に逃れた十一万人以上の難民の姿は、圧政の証拠そのものであるからだ。

DKBAは、「DKBO支配区は戦闘もなく、平和に暮らすことができる」と難民たちに訴えかけた。しかし、難民たちは、SPDC軍の過去の行状を十分知りつくしており、ビルマ軍の息のかかったDKBAの言葉を信じようとはしなかった。そこで、DKBAは強硬手段に出たのであった。

ある難民は、ホイックロークキャンプ襲撃が始まる二時間前の様子を語った。

「三月十日夜十一時ごろ、ヘッドライトを消した不審な車と無灯のオートバイ四台が難民キャンプ内を走っているのを見た。その約二時間後、ロケット砲が炸裂し、自動小銃の発射音が鳴り響いた」

このキャンプに車やバイクを乗り入れるには、必ずタイ軍のチェックポイントを通過しなければならぬ。タイ軍はDKBAの侵入を見て

見ぬ振りしたのだ。

後日、難民キャンプの安全確保について、タイの国家安全保障局長官は、「確かに、タイ軍による難民の保護は手薄であった」と認めている。また、ターク県知事は、「襲撃の数時間前には、侵入者の事実当局に報告されていた」と語った。ホイックロークキャンプを警備していたタイ軍は完全にDKBAとSPDC軍と通じていたようだ。

相次ぐDKBA、SPDC軍の襲撃から難民を効率よく保護するという目的で、十七(当時)ある難民キャンプを七か八にまでキャンプを統合化する計画が、タイ政府とNGOの間で数年前にきあがっていた。

今年二月四日、人口三万人を抱える最大の難民キャンプ・メラキャンブに向けて、近くのキャンプから難民の移動が始まった。アスファルト道路が整備された国道一〇五号線沿いのキャンプ間の移動は簡単で、キャンプの統合化には何ら問題がないようであった。

北部地域では、二月十二日から難民の移動が始まる予定だった。クロバ、ウダタ、メエタ、メサクの四つ

のキャンプの難民計約八千五百人が、メラモルアンキャンプに移ろうとしていた。私は、一ヶ月に及ぶ移動計画の第一段階の始まりを見ようと、人口約五千人のメラモルアンキャンプに入っていた。

### 統合計画に難民の抵抗

メラモルアンキャンプへの道のりは険しい。四輪駆動車を使っても、人里離れたジャングルの奥深くに位置するキャンプへ到達するのに、国道から、最低二時間以上かかった。雨季の期間、私の乗った車は何度も立ち往生し、冷たい雨の降る山の中で一晩を過ごしたこともあった。難民や移動物資を乗せたトラックがそんな山道を、一度に八十台近く通るとは想像できなかった。

日中三十五度近くまで上がった気温は、陽が落ちると急激にさがり始める。厚手の長袖シャツや防寒用のジャケットを着込んで寒さを感じるくらいであった。

夜八時近く、新しくやって来る難民たちのためにメラモルアンの人たちが炊き出しの用意を始めていた。

数百の小袋に分けられた暖かいご飯や大鍋スープも準備された。キャンプ内の広場には防寒用のテントが張られ、蚊帳も人数分だけつり下げられていた。新しく着いた人たちが次の日から家造りに取りかかれるように、一家に五十本ずつ大竹が割り当てられるよう手配もなされていた。

しかし、待てどもトラックがやってくる気配はなかった。もしかしたら、何か事故でも起こったのでは。悪路が続く山道だけに心配がつのる。空を見上げると、打ち上げ花火の残り火のように、満天に輝く星が私の心を鎮めてくれた。結局、その日は誰一人として新しい難民は到着しなかった。

翌日、詳しい事情が分かった。難民たちが当日になって移動を拒んだのだ。理由は、メラモルアンは、マナプロウから最も近いキャンプだからDKBAやSPDC軍からの攻撃を受ける恐れがある。そんなキャンプには移りたくないとか。

また、サルウィン河流域の国立公園内で、難民を使って違法にチーク材を伐採しているタイの材木業者から、「動きたくなければ動かなくて

もいい。難民にも居住権利はある」と吹き込まれた人たちもいた。

タイ政府関係者、NGOの責任者、カレン族難民委員会（KRCC）の代表者が難民たちを説得したが無駄だった。結局、北部の難民キャンプの統合は結果として失敗に終わった。

この計画に携わったある関係者が言った。

「人を簡単に右から左へ動かすことはできなかった。たとえ難民といえども、ほんの一メートルでも、愛着のある土地の近くに住み続けたいという気持ちを持ち続けていたことに気づかされた」

### カレン軍のあぶりだしを狙う

日本に帰国していた私に三月十日、メソットの友人から「緊急警告」と題する電子メールが届いた。内容は、数百名のDKBAとSPDC軍がタイ・ビルマ国境を越え、メラ難民キャンプを襲撃する可能性があるという内容だった。

しかし、この攻撃は、あらかじめタイ軍によって察知され、不成功に終わった。おそらくこの失敗により、

次の攻撃目標として翌三月十一日未明、ホイッククロークキャンプが狙われたと推測される。

同じ越境攻撃に対してタイ軍は二つの異なった対応をした。一方では臨戦態勢に入り、ある一方では越境を見逃し、難民キャンプ襲撃を黙認した。国境を警備するタイ軍の中に、親KNU派とそうでない勢力が交じり合っている状況はつきりと読みとれた。

数多くのNGOが活動を続けているこの時期、難民キャンプを襲撃すれば、国際社会の注目を浴び非難されることは明白だった。それなのになぜSPDCは、難民キャンプを攻撃するという暴挙に出たのか。SPDCには国際的な非難を受けても良い十分な理由があった。それは、

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の積極的な介入をSPDCは望んでいたからではないか。とん挫しつつあった難民キャンプの統合化を一挙に押し進めるため、難民キャンプを襲撃したのだ。

軍事的にKNUを追いつめたSPDC軍であったが、完全にカレン民族同盟軍（KNLA）を制圧するこ

とはできないままでいた。劣勢に立たされたKNLAは、自家製地雷を使ったり、夜襲・待ち伏せを仕掛けるなどして、完全なゲリラ戦に転じた。SPDCはそんなKNLAを一掃できないままでいた。

カレン兵たちはこれまで、解放区内の「村人」の中を泳ぎ回って生き抜いてきた。支配区を持たなくなったKNUはいま、「難民」の中に身を潜め、反撃を続けている。KNUが否定しようが、それは紛れもない事実である。

しかし、難民を前にして、誰が戦闘員かそうでないのか、判断しようがない。難民とKNLA戦闘員を分けるのに、UNHCRの関与は最も言い訳の立つ手段である。

難民キャンプの集約化、戦闘員と非戦闘員の分離という仕事をNHCRに肩代わりさせようというのが真相であろう。難民保護という名目で、UNHCRの参加に反対する者はいないであろうから。

### 弾圧に手を貸す日本の援助

昨年末から話はあったといえ、U

NHCRを受け入れるという、タイの難民政策の転換は、結果として、弱体化したKNUにとどめを刺すことになるだろう。国境の町メソットが、経済開発地域の一つとして経済省に指定され、翌年から約千百万バツの予算の受けることになったのは偶然だろうか。対ビルマ貿易の拠点として経済開発を待つメソット近郊で、いつまでもカレン族に反ビルマ闘争を続けられてはタイ政府も頭が痛い。経済的に苦境に立つタイ、ビルマ両政府の利害が一致したということだ。

難民キャンプに入る直前、KNUの最高責任者ポー・ミヤ議長に、KNUの弱体化について尋ねてみた、「国際社会はこれまで、停戦・和平に向けて話し合いの仲介を求めてきたKNUの訴えを無視し続けてきた。我々は孤立無援で自分たちの生存を守ってきたのだ。これからも戦い続ける。それがカレンに残された道だから。君の出身地日本は、普通の村人に暴行を加える現ビルマ軍の基礎をつくり、今なお軍事政権に支持を与えているじゃないか。政府軍の拷問のやり方は旧日本軍から受け

継いでいるぞ」。ポーミヤ議長は目を大きく見開いてはつきりと答えた。

このままカレンの闘争は先細りし、彼らの抵抗の歴史は小さな出来事として記録されるのにすぎないのか。

いや、自らの土地を愛し、誇りを持ち続けるカレン人がいる限り、新たな抵抗運動の芽がどこかで出てくるだろう。

△写真キャンプション△

・平和な難民キャンプの朝(タイ側)

・大規模な難民襲撃は、95年から始まった(タイ側のポノキャンプ)